再開後，7年間で入館者総数，約2,784人，1日当たりの平均で1人強，大正前半の黄金時代に比べて，なんと寂しくなってしまったことでしょう．身近に迫りくる戦争の足音の中で，もはや人々は博物館を見学するような余裕を失っていたのでしょうか．そして，戦時体制下での所員増加のため，1939年（昭和14年）には陳列館の一部が実験室に転用され，さらに翌1940年（昭和15年）には，「陳列館の一般への公開を暫時中止」するに至りました．この中止が「暫時」に終らなかったことは，ご存じのとおりです．鉱物陳列館が，木挽町の庁舎もろとも，空襲で焼失してしまったのは，そしてごく一部を除いて貴重な標本類が永久に失われてしまったのは，戦争も末期の1945年（昭和20年）5月25日夜のことでした．

以上を要約すると，第3図のようになります．図のアミ目の時期は展示が公開の，実線の時期は非公開ないし半公開の期間を示します．（溝ノ口時代を半公開とした点については御容赦下さい）．こうして見ると，第1に気付くことは，地質調査所の展示の公開が非常に古くから行われているということです．少くとも，標本類を公開しようという努力はいつも払われています．第2は，それにもかかわらず，実際の公開期間が意外に短かい，ということです．木石陳列所が4年間，鉱物陳列館になって第1期が7年，第2期が2年，第3期が7年と，戦前の70年の歴史の中で，公開期間は通算して20年位しかありませんでした．地質調査所は明治以来の日本の近代化の流れの中が活動してきたわけですが，関東大震災による焼失—その後，10年間の再開準備といい，大戦による閉鎖・空襲による焼失—その後，35年にわたる半公開期間といい，展示部門は社会の激動の荒波をもっとも直接にかぶってきました．そして，大正前期と昭和初期を比較してすぐ分るように，公開展示というものは，多くの来館者の直接の支持の上に成り立っているものですから，平和な時代でなくては成立しません．好奇心・向学心というのは，平和な時代にこそ充分に発揮されるでしょう．

地質標本館が筑波に開館してはや10年．この間ずつと公開を続けてこられたのは，本当に幸せなことです．この最長連続開館記録が，今後どこまでも更新されていくことを望んでやみません．

SAKAMOTO Toru (1990): Short History of the museum attached to the geological survey of Japan at Pre-World War II.

<受付：1990年5月1日>

地質標本館開館10周年記念行事

（1）講　演　会

題　目：恐竜時代と地球環境　—その進化と絶滅—
国立科学博物館地学研究部長　小畠　郁生氏

地下からの手紙の解読　—宝石・鉱物—
東北大学名誉教授　砂川　一郎氏

期　日：8月20日（月）　（14時～17時）

会　場：工業技術院筑波研究センター共用講堂

（2）特　別　展　「宝石と貴石展」・「三葉虫の世界」

期　日：8月20日（月）～8月24日（金）

会　場：地質標本館

（3）野外観察会　川原の石と砂金さがし

期　日：8月26日（日）　場所：茨城県大子町

（4）小・中学生のための「岩石・鉱物・化石」相談

期　日：8月27日（月）　（10時～16時）　場所：地質標本館

問い合わせ：地質標本館　Tel. 0298・54・3751